

ドレイファスがサールに反対して展開した議論の多くはフッサールにも向けられている。というよりも、ドレイファスのサール批判は、フッサールの志向性に関する見解がサールが『志向性』(Searle 1983)で表明した見解ときわめて類似することを指摘した上で、ハイデガーやメルロ＝ポンティのフッサール批判をサールに適用するというかたちで組み立てられているのである (cf. Dreyfus 1991, 1999, 2000)。こうした事情は、行為のなかの意図が問題となる場面でも変わらない。

ドレイファスのやり口の強引さや乱暴さを指摘することは、さほど難しくないだろう。たとえば、サールが行為を意図と関連づけて論じたのに対して、フッサールが行為論の文脈で取り上げるのはほぼ一貫して意志 (Wille) である。こうした重要な違いを無視することではじめて成り立つドレイファスの戦略は、ひかえめにいっても雑だろう。しかしその一方で、ドレイファスのサール／フッサール批判は、両者の重要な一致を捉えてもいる。というのも、すぐ後で簡単に述べるように、進行中の行為に表象的な (つまり、充足条件によって個別化される内容を持った) 志向性を認めるというサールの考えについて、そのかなり正確な対応物をフッサールに認めることができるからである。そして何よりも重要なのは、まさにこうした共通見解こそ、行為論の文脈でドレイファスがサールとフッサールに向ける批判のターゲットであるという点だ。この問題に正面から取り組まない限り、ドレイファスのフッサール解釈の不備を指摘することは、それ自体としてどれだけ正しいのだとしても、揚げ足取りをしているという評価を免れないだろう。

以上をふまえ、本レクチャーでは、進行中の行為は表象的な志向性を持つという見解を、フッサールの意志の現象学の観点から擁護する (フッサールの行為論そのものについては、Uemura 2015, 123–127 および植村 2015 を参照)。フッサールによれば、進行中の行為は志向的な経験である。つまり、たとえば約束した時間に間に合うように喫茶店に向かうことは、展望台から街を見下ろすことや、不正行為に怒りを覚えることなどと同様に、その主体による独自の気づきを備え、特定の内容を持つことで何かについてのものであるような出来事 (ないしプロセス) とみなされるのである。さらに、進行中の行為を意志経験の一種 (「行為意志 (Handlungswille)」) とみなすことで、フッサールは、行為が「世界から心へ」という適合の向きを持つというサールの見解に接近する。ここまでは、フッサールの立場はたしかにサールのそれに類似している (ただし、意図と意志の違いを無視する限りで)。しかしフッサールの議論には、少なくともサールには表立って見られない要素も含まれる。フッサールは意志経験の範例を (熟慮に基づく) 決意に求めたうえで、進行中の行為をこの範例と関連づけることで、前者も後者と同様に志向的な意志経験であることを示すのである。ただし、フッサールによる一連の議論は、進行中の行為に関する現象学的

な分析からストレートに導かれるわけではない。進行中の行為が主體的には捉えがたいものであることを認め、ある草稿では行為意志は「無意識的」であってもいいとさえ述べるフッサールにとって、そうした経験を（熟慮に基づく）決意と一人称的観点から比較して構造上の類似性を浮き彫りにするという筋道の議論は、現実的ではない。進行中の行為が意志経験の一種であることはむしろ、私たちの行為者としての合理性に関する現象学的な視座から裏書きされるのである。

ここで注意しなければならないのは、上に概略を示したフッサールの立場の再構成が哲学史研究として妥当であるかという問題は、本レクチャーにとっては基本的にどうでもいいということである。本レクチャーはあくまでも現代現象学を主題とする。今回私が示したいのは、進行中の行為は表象的な志向性を持つという見解に対してフッサールを手掛かりとして現象学的な後ろ盾を与えることができるということではない。別の言い方をすれば、今回擁護される見解がフッサール自身のそれと一致するという判断も一致しないという判断も、私は本レクチャーの範囲内では下さないでおきたい。しかし、なぜこうした断り書きが必要なのかについては、時間の許すかぎりレクチャー内で触れるつもりである。というのも、現代現象学が（少なくとも現時点では）いわゆる古典的現象学に多くの着想を求める以上、現代現象学は古典的現象学に関する哲学史研究とどう違うのかという疑問には、あらためて明確な答えを出す必要があると感じているからである。また、古典的現象学に依拠しながらも私とは正反対の主張に至るように見える池田のレクチャーとの対比も、現代現象学とは何か・何であるべきかを考えるにあたって重要な手掛かりを与えてくれるように思われる。こちらについては、ディスカッションの時間に触れることができるのではないかと期待している。

文献（要旨内で言及したものに限る）

Dreyfus, H. L. 1999. "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis." *Philosophical Topics* 27/2, 3–24.

Dreyfus, H. L. 2000. "A Merleau-Pontyan Critique of Husserl's and Searle's Representationalist Accounts of Action." *Proceedings of the Aristotelian Society, New Series*, 100, 287–302.

Searle, J. R. 1983. *Intentionality*. Cambridge University Press.

Uemura, G. 2015 "Husserl's Conception of Cognition as an Action. An Inquiry into its Prehistory." In M. Wehrle & M. Ubiali (eds.), *Feeling and Value, Willing and Action*, Springer, 119–137.

植村玄輝 2015. 「行為と行為すること——フッサールとともに現象学を拡張する可能性について」、『情況』第四期 2015年8月号、127–139頁。